



Toyota
Municipal
Museum
of Art
豊田市美術館

C a r p e D i e m

S e i z e t h e d a y

カルペ・ディエム
花として今日を生きる

2012年6月30日[土] — 9月23日[日]

豊田市美術館



- 休館日 月曜日 [7月16日、8月13日、9月17日は開館]
- 開館時間 午前10:00—午後5:30 (入場は午後5:00まで)
- 主催 豊田市美術館 日本経済新聞社 テレビ愛知
テレビ朝日
- 協力 アーサー・サンダーソン&サンズ社 小原観光協会
株式会社JVCケンウッド 株式会社花ごころ
株式会社ミネルバ 昭和理化 日本バイオ株式会社
マナトレーディング株式会社
- 観覧料 一般1,000円 [800円] / 高校・大学生800円 [600円]
中学生以下無料 [] 内は20名以上の団体料金
市内高校生、障がい者及び市内75歳以上は無料 [要証明]
- 前売券 豊田市美術館、チケットぴあ [Pコード765-149] で
6月29日 [金] まで発売
- 問合せ先 豊田市美術館
〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1
Tel.0565-34-6610
<http://www.museum.toyota.aichi.jp>

伊島 薫 | Sakai Maki wears Jil Sander | 2008 | 作家蔵 design by Hiroshi Nakajima



展覧会の内容

私たちは時おり、明日の準備のために今日を犠牲にして過ごすことがあります。しかし、今日を深く生きなければ、明日もまた深く生きられないのは自明ともいえることです。人生の無常を伝えるローマ時代の格言、「カルペ・ディエム（今日を生きよ）」は、幸福の原点を未来に追い求めるのではなく、日々の暮らしの中に見出す言葉ともいわれます。

展覧会では、花をモチーフにした現代作家12名の絵画、写真、映像、インスタレーションなどを紹介するとともに、12名の作品に先立ち、花摘みの物語や生と死の図像を現代に伝える16世紀の版画や、ウィリアム・モリス、夏目漱石などの書籍、竹久夢二の挿絵、藤田嗣治、山本丘人らの絵画も展示します。背景に死の意識を持つことで、生の輝きを照らし出した100有余点の多彩な表現を通して、今を生きることの意義について改めて考えていただければ幸いです。

*カルペ・ディエムの「カルペ（摘め）」は、ローマ時代には花を対象に使われる言葉でした。しかし、詩人ホラティウスは、花の代わりに「今日」を意味する名詞「ディエム」を詩に用いました。このことからホラティウスは、「今日」という日を花積みに例え、その限りある時間を有意義に生きよ、と伝えたかったといわれています。

展覧会の見どころ

● 「花」をテーマに現代作家たちが新作を展開

荒木経惟（1940-）、福田美蘭（1963-）、鬼頭健吾（1977-）、福永恵美（1981-）ら、幅広い年代の現代作家たちが、様々な素材を用いて、花をテーマにした新作を展開します。それぞれの作品からは、初々しい生や仄かに窺える死の影などが、花の表象を通じて浮かびあがります。

● 四季桜で有名な豊田市小原村で撮影

桜と紅葉が同時に見られることで知られる豊田市宮代町（旧・小原村内）で、写真家・伊島薫がモデルのアンジェラ・レイノルズを撮影しました。満開の桜の下、ヴァレンティノの深紅のドレスを着て、自らが望む最期の場面を演じるアンジェラは、妖しいほどの美しさを湛えています。

● ポスター・チラシのモデルは伊島薫撮影による女優・坂井真紀

写真家・伊島薫は、女優やファッションモデルを被写体に、彼女たちが死に直面した場面を撮影するシリーズを、5年に渡って雑誌に発表しました。女優たちの死体は、甘美な雰囲気をもとって、人間の最期の時を想起させます。ポスター・チラシのモデルとなっているのは、伊島が撮影した女優・坂井真紀です。

● 宮島達男の作品が授与されるワークショップ

9月22日午後2時から、美術館の講堂にて、事前にお送りいただいた「あなたの“ぐっとくるもの”」についての文章をもとに、現代作家・宮島達男とともに語り合うワークショップを行います。どなたでもご参加いただけます。最優秀者には、宮島作品が贈られます。

● 16世紀ヨーロッパから大正時代の挿絵、小説の装丁まで幅広い時代の作品を出品

本展では、16世紀の写本版画から、19世紀イギリスのウィリアム・モリス（1834-1896）の装飾画、大正時代の竹久夢二（1884-1934）の挿絵、夏目漱石（1867-1916）の書籍、山本丘人（1900-1986）の日本画など、現代美術に先立つ幅広い花の表象をご覧いただけます。





出品作家

● 荒木経惟（1940 - ）

東京都台東区に生まれる。ヌード写真や人物写真がよく知られているが、花などの静物写真、東京を対象とした都市写真も多い。1963年に千葉大学工学部写真印刷工学科を卒業後、電通に宣伝用カメラマンとして就職（72年まで勤務）。64年《さっちゃん》で第一回太陽賞受賞。71年、妻との新婚旅行の過程を撮影した『センチメンタルな冬の旅』の私家版を出版。1990年に妻の病気が発覚し、亡くなるまでを捉えた『センチメンタルな旅・冬の旅』を出版。1999年に織部賞、2011年に第4回安吾賞を受賞。

*本展では、闇を背景に花と少女の人形、トカゲが浮かび上がる、「墮落園」と題した新作が発表される。作家いわく、闇は東日本大震災を暗示しており、花はそのオマージュであるという。

● イケムラレイコ

三重県津市に生まれる。大阪外語大学在学中にスペインへ渡り、セビリア美術大学で学ぶ。スイスのチューリッヒ、ドイツのニュルンベルクなどを経て、現在はベルリンとケルンを拠点に活動。1980年代に表現主義的な絵画によって注目を集め、その後1990年代から匿名の少女の姿をモチーフにした絵画や陶などを展開。独自の内省的な表現でヨーロッパを中心に高く評価されてきた。「宇宙的な時間や空間を考えると、人間と植物、動物の区別なんて非常にちっぽけなもの」とイケムラが語るように、イケムラの作品の中で、少女は人間の根源的な姿を象徴する存在として表現されている。2009年アウグスト・マッケ賞受賞。2000年、初の大規模な個展（豊田市美術館）、2011、12年に回顧展（東京国立近代美術館、三重県立美術館）を開催。

*本展では、花を描いた未発表の絵画、枯れていく花の姿を記録した写真、そして陶の新作を発表。モチーフであった筍の花にイケムラが同化していく表現の推移を紹介する。

● 伊島 薫（1954 - ）

京都府に生まれる。1970年代末からフリー・カメラマンとして、ファッション誌や広告、レコードジャケットなどの商業写真を手掛けるなか、80年代初めから写真作家としての活動を続けてきた。代表作は1993年に始められた〈死体のある風景〉シリーズ。デザイナーズ・ブランドに身を固めた女優やモデルたちが、理想の死を演じるシリーズである。ドラマのワンシーンのように美しいそれぞれの写真は、伊島が彼女たちと徹底的に議論を交わしたうえで、最期の理想的なファッション、ロケーション、息絶え方をシナリオ化して撮影したもの。「自分の死について考えることは、自分の理想の生き方を考えることにつながる。」 そのように語る伊島の写真は、フィクションと現実、生と死の二極を対置させることで、人間の生の条件や定義について私たちに再考を促す。

*本展では、女優・坂井真紀の作品に加え、スーパーモデルのアンジェラ・レイノルズとのコラボレーションによるシリーズ51作目となる新作を発表。イカロスの墜落のように、空から木の梢に落ちて果てた天使を演じるアンジェラの姿は、桜と紅葉が入り混じる風景の中で、生と死が交感する不思議な世界を想像させる。

● 河原 温 29,043 days（2012年6月30日現在）

河原 温は、代表的な作品である「日付絵画」で世界的に知られる作家である。1965年ごろからニューヨークを拠点に活動している。「日付絵画“Today Series”」は、黒地（しばしば赤、青地）を背景に、制作当日の日付が数字とアルファベットによって白で描かれたものである。そして日付絵画が入る箱の内側には、その日の新聞記事が貼られている。日付という時間を区切る抽象的な単位を、その日のうちに「描く」という行為により、時間と人間存在についての深遠な問いが発せられる作品である。

*本展では、当館の所蔵品の中から《MAY 8,1971》を展示する。箱に貼られた新聞紙には、花畑の中のベトナム戦争の戦没者が眠る墓地が映し出されている。





● 鬼頭健吾（1977 - ）

愛知県に生まれる。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。2005年「ベリーベリーヒューマン」展（豊田市美術館）、2007年「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」展（森美術館、東京）など、多数の展覧会に参加。近年は2011年の「世界制作の方法」展（国立国際美術館、大阪）に出品。初期の頃から一貫して、チープな日用品の表情とけばけばしい色彩を素材に、展示スペースに異空間をつくり出すインスタレーションや、絡み合う有機的な線を用いた絵画などを発表してきた。現ドイツ・ベルリン在住。

*本展には、藤棚をイメージさせるカラフルなインスタレーションの新作を発表。実体のある花ではなく、花のイメージのサンプリング（花摘み）をテーマに空間を形づくる。

● 栗田宏一（1962 - ）

山梨県に生まれる。20代前半に舞踏やパフォーマンスを試み、次いで86年頃から「自然界の一部としての自分」を確認するためにアジア、アフリカ、中南米などの非西欧諸国を旅して歩く。次いでこの旅の経験から足下の土をありのままに提示する表現を構想し、91年に日本列島全域をフィールドにした土採集を始める。2000年の「子供のための美術展 2000」（広島市現代美術館）で、採取した土を並べる作品を初めて美術館で発表。その後も展覧会への出品を続けながら、2010年の「瀬戸内国際芸術祭 2010」（香川）など、国内外の国際展やフランスをはじめとする海外での展覧会にも参加してきた。

*本展には、列島各地の土を入れたシャーレ 49 個による新作を発表。美術館の階段上に大きな円弧を描くように1列に並べられる作品は、見えない円弧を周って元の場所に戻ってくるような配列により、生と死の往来や輪廻を想像させることを意図して構想された。

● 福田美蘭（1963 - ）

東京に生まれ、母方の祖父である童画家の故・林義雄や、イラストレーター之父、故・福田繁雄の仕事を見ながら育つ。1987年、東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了。在学中から視覚的なからくりや複製画の手法を用いて、メディア文化や現代社会の問題を軽快に告発する絵画を発表。1989年に第32回安井賞を受賞し、一躍新しい世代を代表する画家として注目を集める。1991年にはインド・トリエンナーレ金賞、1994年にVOCA賞受賞など、その後も受賞を重ねるなか、1999年の「福田美蘭展 Retrospective」（国立国際美術館、大阪）等、数多くの展覧会を開催してきた。

*本展では、祖父・林義雄と、父・福田繁雄へのオマージュとしての絵画を始め、カルペ・ディエムというテーマに沿った新作6点と旧作2点を発表。

● 福永恵美（1981 - ）

滋賀県に生まれる。2006年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。在学中より一貫して、生花をブリザーブド液で脱色したり、パラフィンや蠟などの素材で花びらを形づくったりしながら、真っ白な花のオブジェを制作してきた。もろく、壊れやすく、脆弱な印象を与えるオブジェは、色彩も社会的な意味も全て剥奪された、絶対零度の凍てつく世界に置かれた花の死の姿を想像させる。2010年、個展「皮膜」を開催（名古屋市市政資料館）。本展が美術館で作品を発表する展覧会となる。

*本展では、菊を用いた聖なる花のオブジェのインスタレーションなどの新作を発表。





●中川幸夫（1918 - 2012）

香川県丸亀市に生まれる。前衛生け花の作家として知られており、生涯にわたって花の生命力を捉えることを追求した。1942年、池坊讃岐支部を勤めた祖父、その後を継いだ叔母の影響で、生け花をはじめ。1951年に「決定的に自由であるために」流派を離れた後は、独自の活動を探求する。1956年、東京に転居。2002年越後妻有アートトリエンナーレにて「花狂」のパフォーマンス。2003年、鹿児島霧島アートの森、大原美術館で個展。2012年、丸亀市で歿（93歳）。

＊中川幸夫の作品は、荒木経惟、森山大道らが写真に収めているが、中川自身も土門拳に師事して写真を撮っており、本展の出品作はすべて中川が撮影した生け花の写真である。

●宮島達男（1957 - ）

東京に生まれる。1986年、東京藝術大学大学院美術研究科油画修了。最初期にパフォーマンスやビデオなどによる活動を行ったのち、87年に発光ダイオード（LED）を用いたデジタル・カウンターの作品を発表し、一躍注目を集める。88年、ベネチア・ビエンナーレ・アペルトに出品。92年、いわき市立美術館、93年にクンストハーレ・チューリヒにて個展。現在まで一貫して「それは変化し続ける」、「それはあらゆるものと関係を結ぶ」、「それは永遠に続く」の3つのコンセプトを表現した作品を世界各地の美術館等で発表。また、長崎で被爆した柿の木の子孫を植樹する「柿の木プロジェクト」など、作品制作に限定されない活動とも取り組んできた。

＊展覧会では、宮島が2003年より継続しているプロジェクト、〈Death Clock〉を紹介。参加者が自分の死ぬ予想日を設定し、自分の写真とともに端末に入力すると、その日までの秒数がカウアウト・ダウンされて表示されるという内容。「残された生の時間を意識することで、生を充実させる」意図を持つプロジェクトである。

●渡辺 豪（1975 - ）

兵庫県に生まれる。2002年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。人の肌や身の回りの本棚、食器などの現実の一部を、精巧なデジタルアニメーションに取り込み、人間の空間や時間に対する知覚や認識をわずかに攪乱する作品を制作する。2005年、豊田市美術館のグループ展「ベリーベリーヒューマン」に参加。2010年、愛知県美術館で「現代美術の発見Ⅶ渡辺豪 白い話 黒い話」。2012年、エスパス・ルイヴィトンのグループ展「コズミックトラベラーズ 未知への旅」に参加。

＊本展では、実際の花の表面を撮影してデジタルアニメーションにし、花が枯れて行く様が不可思議な空間、時間の中で展開する新作を発表。

●ノット・ヴィタル（1948 - ）

生きて（ヴァイタル）・いない（ノット）と、ジョークのようにも聞き取れるその名は本名。スイスの山村セントに生まれ、同国出身の彫刻家であるアルベルト・ジャコメッティや、画家セガンティーニに憧れて20代でパリに出る。その後、イタリアやニューヨーク等を旅しながら独学で彫刻などを学ぶ。作品の多くは、雪山の表面や雪の結晶、子牛の姿といった自然の現象や成長途中の生き物の姿などを形象化した表現が中心。近年はセント、中国の北京、アフリカのニジェール、南米・チリにあるスタジオを往復しながら、各国の文化に根差した作品を発表してきた。

＊本展では、北京で制作された蓮のつぼみの形を硬質な金属の素材に置き換えた白い彫刻を出品。内側に静かな生命力を感じさせるその姿は、宗教上の意味や象徴性から離れた、純粋な視覚の対象としての白き、しなやかな植物の存在を想像させる。





広報用画像 & 読者プレゼント招待券申込書

お名前：

ご所属・媒体名：

出版物・放送予定日（日時）： 2012年 月 日 : ~ :

ご住所： 〒

電話：

以下の画像を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は貸し出しをご希望されるデータの□にチェックを入れ、ファックスまたはメールにてご連絡ください。

- a. 伊島薫 《Sakai Maki wears Jil Sander》 2008年 ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵
- b. 荒木経惟 《墮樂園》 2012年 作家蔵
- c. 宮島達男 《Archive of Death Clock》 2011-12年 作家蔵 協力：Akio Nagasawa Publishing
- e. 福田美蘭 《Two bouquets》 1991年 アクリル、カンヴァス、生花、額縁 作家蔵
- d. ノット・ヴィタル 《Lotus》 2011年 ニス、ステンレス・スチール アクリライケダギャラリー蔵
- f. 渡辺 豪 《それになるためにそれを摘むこと》 2012年 アニメーション 作家蔵
- g. 福永恵美 《g reenhide》 2006年 パラフィン蠟、蜜蝋、油絵具、脱色した菊の葉、木材、ガラス容器 作家蔵

《使用条件》

- ・画像は、展覧会の目的にのみご利用ください。第三者に渡すことはしないでください。
- ・使用后、画像データは消去してください。
- ・キャプションは、作家名、作品名、制作年、(場合によっては) 所蔵先を必ず表記ください。
- ・作品画像のトリミング、文字のせはご遠慮ください。
- ・情報確認のため、お手数ですが校正紙を担当者へお送りください。Webサイトの場合は、掲載時にお知らせください。
- ・読者様・視聴者様へのプレゼント用招待券の手配も可能です。ご希望の際はお申し付けください。

FAX 送付先：豊田市美術館 広報担当行き 0565-31-4983

Emai：bijutsukan@city.toyota.aichi.jp





広報用画像一覧



a. 伊島薫 《Sakai Maki wears Jil Sander》 2008年
ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵



b. 荒木経惟 《墮樂園》 2012年
作家蔵



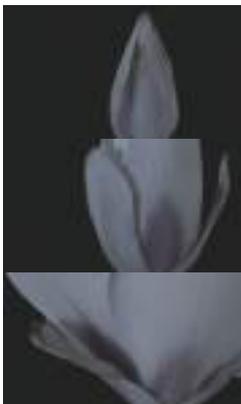
c. 宮島達男
《Archives of Death Clock》
2011-12年 作家蔵
協力：Akio Nagasawa Publishing



d. ノット・ヴィタル 《Lotus》 2011年
ニス、ステンレス・スチール
アキライケダギャラリー蔵



e. 福田美蘭 《Two bouquets》 1991年
アクリル、カンヴァス、生花、額縁
作家蔵



f. 渡辺 豪
《それになるためにそれを摘むこと》
2012年 アニメーション
作家蔵



g. 福永恵美 《greenhide》 2006年
パラフィン蠟、蜜蝋、油絵具、脱色した菊の葉、
木材、ガラス容器 作家蔵

